

---

# 喉

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喉

### 【Nコード】

N0292Z

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

バーテンダー義春は店に来る美女の綺麗な喉を見て切りたいたい欲望を抱きそれが抑えられなくなってきた。その彼に松本沙耶香がしたこととは。高橋葉介先生の作品のオマージュです。この作品では沙耶香は助っ人となります。

## 第一章

喉

伊吹義春はバーでバーテンをしている。この仕事は夜の仕事だ。日々カクテルを作り客の相手をしている。その中でだ。

ふとカウンターにだ。一人の女が来たのだ。

顔立ちは楚々としており髪は黒くショートにしている。やや小柄で華奢な感じの身体だ。胸はあまり大きくはなさそうである。

服は清楚な感じで気品のある上着にロングスカート、どちらも淡い大人しい色である。一見すると育ちのよい何処かのお嬢様である。しかしだ。義春がそこで見たのは。

首だった。彼女の喉だ。真珠のネックレスで飾られたその首は。長く白くだ。非常に形のいいものだった。その首を見てだった。思わず見惚れて。それで思ったのだった。

「口付けをしたい」

交際してだ。そう思ったのだ。

だが告白はできなかった。彼は奥手だったのだ。彼女もおらず真面目にバーで働いただけだった。だが一旦そう思うとであった。

昼も夜も彼女、その首のことだけを考えるようになり。それでだ。夢にまで見る様になった。

夢の中で彼女と抱き合いその喉に接吻をする。そうした夢ばかり見るようになった。

それが一月程続いた。夢はやがて。何故かだ。夢の中で刃を持ってだ。

その喉に接吻してから切り裂く様になった。切り裂いた喉から。鮮血が飛び散り全てを紅に染める。彼女の白い身体も彼自身も。そうしてた夢を毎日見るようになった。そして彼女もまた。

毎夜店に来てだ。カウンターで静かに飲む。その姿は自然と目に入ってしまう。実際にだ。彼女のその喉を一気に切ってしまうので

はないか。

こんな風にも思うようになってきていた。そんな中でだ。ある日店が終わり帰る時にだ。不意にだった。

呼び止められた。呼び止めたのは。

女だった。長い黒髪を頭の後ろで丸めてまとめている。切れ長の奥二重の目に白く細長い顔、高く筋の通った鼻立ち、紅の小さな唇。背は高く見事な身体をしている。その身体を黒いスーツとズボンで多いネクタイは赤、ブラウスは白だ。その彼女が夜の中から出て来てだ。

彼に声をかけてきたのだ。

「悩んでいるわね」

「貴女は？」

「魔術師よ」

女は微笑んでこう答えた。

「黒魔術師。名前は松本沙耶香というわ」

「松本さんですか」

「ええ、よかつたら覚えておいて」

その切れ長の目を細めさせてだ。沙耶香は義春に告げた。

「この東京にいる。魔術師よ」

「占い師とかではなくて」

「占いもできるけれどそれは仕事じゃないわ」

「仕事はあくまで魔術師ですか」

「そうよ。それでね」

その黒い、琥珀を思わせる目で義春を見てきた。そのうえでだった。

沙耶香はだ。こう彼に言った。

「いつもお店に来ている女の人が気になるわね」

「わかるんですか」

「魔術師にとって人の心を読むのは基礎の基礎よ」

そうだというのだ。

「これ位訳はないわ」

「何か怖いですね」

「怖がる必要はないわ。それが魔術師だから」

「ですから魔術師自体がです」

「まあまあ。それでね」

そうしたことはいいとしてだ。さらにだ。

沙耶香は微笑みだ。また義春に話した。

「貴方、このままだとね」

「このままだと」

「彼女を殺してしまうわ」

そうなるのだ。沙耶香は彼に言った。

「彼女の喉を切りたいと思ってるわね」

「まさか。そんな」

「夢に見てるわね。毎日」

しかしだった。沙耶香は。

今度は義春の夢のことまで話してだ。そうしてなのだった。

彼の願いを無意識下のものまでだ。言ってみせたのだ。

## 第二章

「夢は願いがそのまま出る世界だから」

「じゃあ僕は本当に」

「彼女を殺したいと思ってるわ。その喉を切り裂いてね」

「どうしてそう思うんですか？」

「彼女が奇麗だからよ」

それでだと答える沙耶香だった。

「奇麗だから切り裂いてね」

「喉をですか」

「奇麗なものをあえて壊す」

沙耶香は倒錯の世界から話した。

「それは人がしたいと。時に思うことだから」

「だからですか」

「ええ。だから貴方はこのままだと」

「彼女を殺す」

「彼女だけでなく貴方自身もね」

人を殺めることによってだ。義春自身も破滅するというのがだ。

「そうなってしまっわ」

「あの、それは」

「殺したいかしら。そして破滅したいかしら」

その琥珀の目でだ。義春を見ながら問うた。

「貴方は。どうかしら」

「まさか。そんな」

そんな筈はないとだ。すぐに答えた彼だった。

「人を殺すなんてとても。それに」

「そうよね。楽しく生きたいわよね」

「そうです。絶対に」

「それならね。任せて」

「任せる、ですか」

「報酬は暫くここで無料で好きなだけ飲める」

口の端に笑みを浮かべて言う沙耶香だった。

「それでね」

「僕が人殺しにならないように」

「できるわ。どうかしら」

「あの、本当ですよね」

「嘘だと思っの？」

「何か。信じられないです」

沙耶香の言うことが全てだ。そうだというのだ。

「何ていいですか」

「けれど私は貴方の夢の中まで全部言ったわね」

「はい、それは」

「それが証拠よ。私は魔術師だから」

それでだ。全てわかるといふのだ。そしてだ。

「全てを解決させられるわ」

「そうなんですか」

「貴方も。彼女も」

義春だけでなくだ。その彼女もだというのだ。

「助けられるわ。それでどうするのかしら」

「ここで暫くはですか」

「そう。私が好きなだけ飲める」

言いながらだ。沙耶香は自分のカクテルを見る。オレンジとラム

のだ。プリンターズオレンジである。

それを目にしつつだ。彼女は言うのである。

「どうかしら」

「それで僕が人殺しにならないのなら」

「いい話だと思っけれど」

「はい」

その通りだと答える義春だった。こうしてだった。

話を決めてだ。そうしてだった。

沙耶香は早速動いた。その日にだ。

カウンターで飲みながら待つ。暫くしてだ。

その彼女が来てだ。カウンター、自分の隣に来るのを見た。その彼女を見てだ。

目を赤く輝かせた。するとだ。

急にだ。彼女だけでなく義春もだ。

動きを止めそしてだ。自然にだった。

気付いたその時にはだ。何もない空間に二人きりでいてだ。

義春は手にナイフを持ちそして。

美女の喉を切り裂いた。するとそこから。

禍々しい黒い瘴気が出て来てだ。彼を包み込みそのうえで溶かそうとしてきた。だがその瘴気に対して。

天使、喉を切られた美女そのままの姿の白い翼のそれが出て来てだ。その黒い瘴気をだ。

翼を飛ばたかせその風で消し去った。そうだったのだ。

そしてまた気付けばだ。二人は。

店の中に戻っていた。カウンターにだ。そこでだった。

義春は呆然としてだ。カウンターでカクテルを飲んでいる沙耶香に尋ねたのだった。

「あの、今のは」

「願いは果たされたわ」

「そうですか」

「それでね」

さらにだというのだ。それに加えて。



### 第三章

「願いの中にあつた黒いもの」

「人を殺したいという。奇麗なものを壊したいという」

「その願いに襲われたわね」

「あれですね」

「その恐ろしさはわかったわね」

「一瞬ですけれど」

確かにわかったとだ。義春は答えた。

「何ていいますか」

「溶かされそうになつて」

「はい、そうです」

「あれは人の中にある邪な願いよ」

それそのものだというのだ。

「貴方が思っていた。それよ」

「それがあれですか」

「そう。けれどね」

そのだ。願いがだというのだ。

「全て出て貴方を襲い」

「そしてそれが」

「清められたのよ。彼女に」

沙耶香は自分の隣にいる彼女を見る。しかし彼女はまだ動きを止めたままだ。今動けさせるのは沙耶香と義春だけだった。

「天使である彼女にね」

「清められた。彼女に」

「その疚しい思いがね」

それがそうだったというのだ。そのことを話してからだ。

沙耶香はあらためてだ。義春に尋ねた。

「それだけけれど」

「今はずね」

「ええ。まだ切りたいかしら」

義春の目を見て。そのうえで尋ねるのだった。

「それはどうかしら」

「いえ、それはもう」

どうかとだ。彼はすぐに答えた。

「ありません」

「邪念が全部出てそれが清められたからよ」

「それでなんですか」

「ええ。私の魔術で」

まさにだ。それによってだった。

「そうだったのよ」

「有り難うございます」

それを聞いてだ。すぐにだった。

沙耶香はくすりと笑ってだ。こう彼に言った。

「彼女とはどうするのかしら」

「この方ですか」

「ええ。もう邪念は消えたけれど」

「とはいいまして」

実はだ。その邪念以外にはなかった。それではだった。

もうその美女には客として興味はなくだ。それで言う言葉は。

「もう特にありません」

「そう。わかったわ」

沙耶香もその言葉を聞いて頷いた。それでだ。

あらためてだ。義春にこう言った。

「なら約束はね」

「ええ、これから暫くですな」

「このお店で好きなだけ飲ませてもらうわ」

「助けてもらいましたから」

それでだ。彼は言っただ。

そのうえでだ。早速カクテルを一つ作り。沙耶香に差し出してだ  
った。

「はい、どうぞ」

「あら、早速ね」

「そうです。モスコミュールです」

そのカクテルをだ。沙耶香に差し出してだった。

「どうぞ」

「では早速ね」

「飲んで下さい」

笑顔でこう話してだった。沙耶香にそのモスコミュールを差し出  
すのだった。そして沙耶香もそのカクテルを手に取りだ。

一口飲む。それから言う言葉は。

「美味しいわ。これからもね」

「はい、暫くの間は」

「楽しませてもらうわ」

こう言っただ。美女の方を一瞥してだ。

くすりと笑う。笑うとだった。

美女も我に返っただ。こう言っただのだった。

「あつ、何かありましたか？」

「あつたわ。少しね」

沙耶香はその笑みで美女に話した。

「貴女が助かったことがね」

「助かった？私ですか」

「そうよ。貴女が気付かないうちにね」

そう言ったとだ。彼女に話すのである。

「そうになったのよ」

「気付かないうちになって」

「こうしたことはあるものよ。気にしないで」

「そうですか」

何が何だかわからずにだ。きよんとする顔になっている美女だ

った。だが義春は彼女にもカクテルを奢り沙耶香は飲み続け。その  
美女を見て微笑むのだった。

喉 完

2011・7・26

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0292z/>

---

喉

2011年12月1日01時56分発行